

## 校長室より

## □「研究は終わりが無い。好奇心が出てくる限り続く」

2019年4月11日、新聞各紙でトップニュースとなったのが「ブラックホール」でした。世界で初めて撮影されたその姿は、高温のガスやちりが放つ円形の光を背景に、黒い穴が浮かび上がるように写っていました。ブラックホールは恒星の残骸などの大量の物質が圧縮され、強い重力を持ち、光も通さない天体だそうです。今回の写真は、地球から5500万光年離れたおとめ座のM87銀河にあるブラックホールの姿でした。

100年以上前にアインシュタインがその存在を予言していたものが、ようやく写真に収められたもので、今回のブラックホールは地球から見ると、月の上にあるテニスボールを写したぐらいの大きさだそうです。今回は、世界6カ所の望遠鏡を連携させて地球規模の巨大な電波望遠鏡をつくり、見事に写真に収められたのです。

理論上でしか分からなかったこと、見るができなかったものが、世界中の科学者が協力して見えるようになった、私はそのことに感動しました。ノーベル賞級の成果だとも言われています。改めて科学の力、そして人類の力は凄いなあと思いました。アインシュタインの理論と夢を多くの科学者が受け継ぎ、日々の研究の積み重ねがそれを可能にしたのです。大げさかもしれませんが、閉塞感が漂いがちな今の社会に、希望の光を見た気がします。人類の可能性や明るい未来をもっと信じて良いのだ、とも思います。

翌4月12日の山陰中央新報には、松江市玉湯町ご出身の国立天文台水沢VLBI観測所（岩手県）助教の秦和弘さん（35）が世界初のブラックホール撮影に主要メンバーとして携わったことが報道されました。秦さんは望遠鏡の運用や観測戦略の立案、画像解析などを担当されたそうです。

秦さんは小学生のころから宇宙に関する図鑑を愛読し、天文学者になる夢を描いて、市内の高校を卒業後、名古屋大で天文学を学び、総合研究大学院大学（神奈川県）に進まれたそうです。この記事に触れ、遙か彼方のブラックホールが、少し身近に感じられました。また、秦さんの言葉が次のように紹介されていました。「研究は終わりが無い。好奇心が出てくる限り続く」。研究への意欲と決意がとても力強く感じられる言葉です。今後の秦さんの更なるご活躍を期待したいと思います。

さて、宍道高校は今年度で創立10年目を迎えました。生徒の皆さんには、「発見 敬愛 自律」の校訓のもと、「できた」という喜び、「わかった」という楽しさ、「目標を達成した」という充実感を、教多く積み重ねて欲しいと願っています。

今年も「ともに学ばん この丘で」、10年目の歴史を一緒に刻みましょう。

## 編 | 集 | 後 | 記

5月1日から元号が令和となり、あっという間に2週間が過ぎた。4月1日の新元号発表の時の騒ぎにくらべると、ずっと落ち着いた雰囲気であったような気がする。私自身は発表時から「令和」という元号にさほど違和感をもたず、「まあいいんじゃないかな」とぼんやり受け止めた、といった感じであった。

ただ、これまでH\*\*、S\*\*などと書いていた和暦の場合に使う元号のローマ字表記「R」にはなんとなく馴染めていない。R1、R01といった表示を目にするたび、書くたびに「オッ」となってしまう。すぐに慣れるのであろう。けれどこの違和感、言い換えれば新鮮さを感じなくなることも、なにかもったいないような気がする。